

心を育てる学級経営「月号

4. 作品とノート活用から「実力」を判断する方法

熊本市立出水南小学校教諭

村上浩一

① 低 教師作成のもので対比する

1. 国語科のノートにて

低学年では、国語科の授業時数の割合が高い。総授業時数に対する国語科のそれは35%にもなるのである。国語科のノート指導をどうしていくかは、死活問題とは言い過ぎかもしれないが、それだけ重要であるということだ。そこで、ここでは国語科に絞って書いていくことにする。

2. 板書通りにかけているか？

まずは、板書通りに書けているかである。これが意外と書けていないことが多い。それを子どもたちのノート間で後日、比較評価することになるから、評価にいい加減さが生じてくる。又、このやり方だと相対評価となってしまう。昨年から絶対評価に変わったばかりだ。そこで大事なものは、基準である。この基準を教師作成のノート（板書計画）にすることで、実力が判断できる。

つまり、

子ども用のノートに書いた板書計画で実力を判断するのである。

その通りに書いているかということは、関心意欲にもつながるが、これは学力の土台ともなっていく。全時間の板書計画は無理にしても、板書計画（図1）と子どものノート（図2）を対比していくことで、即時に次のようなことが判断できる。

行数の違いによって、漢字の部分を一ひらがなで書いていることや句読点の打ち間違い、文の書き出しの違い等に気づくことができる。

意外と、教師は大学ノート等に板書計画を書くものである。ここが盲点ではないかと考える。

3. 意見は書けているか？

次は、それぞれ子どもたちに焦点をあてていく。つまり、

教師の準備した解と子どもたちの意見を見て、実力を判断する。

まず、意見が書いてあれば思考しようとしているということだし、赤でチェックがしてあれば関心意欲があり、自己評価ができていくということである。その上で、次のようなことが判断できる。

この子は、本文が読解できているのか、どの程度の問題までなら答えることが可能なのかということに気づくことができる。

教師が解を準備していなければ、判断が

狂ってくるだろう。

そして、もう1つのノート評価として、欄外にメモ（図3）をしているかという点とである。授業中に文字にはしないような重要なことがあるものだ。それらをちゃんとメモしているかということである。これも関心意欲の実力を判断する材料となるだろう。

4・原稿用紙にて

国語科の作品は作文として、原稿用紙に書いていく場合が多いだろう。そこで、まずは教科書の原文をノートではなく、原稿用紙に視写させていきたい。国語の教科書は、挿絵の関係等々で行数や文字数がいい加減である。この教科書の文章を原稿用紙に視写（図4）していければ、原稿用紙の使い方は完璧だし、段落の違いにも気づいていることになる。この力が身につけば、作文を書く際などに応用していけるだろう。

もちろん、一朝一夕にはいかないので、訓練していかねばならない。

その際も、教師が原稿用紙に一度書いて準備しておきたい。

こうすることで、子どもたちがどこで書き写すのを失敗しているのか、すぐ指摘をして、書き直しをさせることが簡単になる。